talk! talk! talk! タレント・アナウンサー・小俣雅子さん

タレント・アナウンサー

小俣雅子さん

たとえば、深夜まで部屋で勉強をしているとき、車を運転しているとき、仕事をしているとき、いつもかかるラジオ番組が楽しみのひとつになっていた。誰にでも、そんな経験があるのではないだろうか。
文化放送で1987年から続いている「吉田照美のやる気MANMAN!」も、そんな多くの固定ファンを持つ人気長寿番組だ。その番組パーソナリティを開始当初から務めているのがタレント・アナウンサーとしても活躍するアナウンサーの小俣雅子さんだ。
今回は、愛用のデジタルカメラの話はもちろん、番組のこと、そしてラジオの魅力などたっぷりと語っていただいた。

プロフィール

おまた・まさこ。山梨県生まれ。東京学芸大学卒業後、文化放送にアナウンサーとして入社。みのもんたさんや高島忠雄さんなどのパートナーとして文化放送の看板番組にたずさわり、1987年に放送を開始した「吉田照美のやる気MANMAN!」に出演、一躍話題になる。1990年、フリーになる。以後、テレビやラジオ、講演、執筆活動など、幅広く活躍を続ける。
「やる気MANMAN!」は文化放送を代表する長寿番組として開始から18年放送を続けている。吉田照美さんとの軽妙なトークの掛け合いは今や伝統芸（!?）の域で、番組を聴く多くのファンの耳を離さない。「吉田照美のやる気MANMAN!」は文化放送（1134kHz）にて月曜から金曜日の13:00〜16:00に放送中。また、現在は「月刊SAY」（青春出版社）、「メトロガイド」（東京メトロの全駅で発行）にて連載中。おもな著書に「下心いっぱいのオムレツ」（青春文庫）「棚からボタモチ床からもボタモチ」（青春出版）など。

まさに青天の霹靂!?「自分の入っていない写真を撮るなんて」

今日は小俣さんと写真の関わりについて、いろいろとお話をうかがいたいと思います。

そう思ってね、自分の撮った写真を見直してみたんですが、つくづくそうだなって思ったことがあるんです。それは、自分のカメラなのにほとんどの写真に私が写っているんですよ。ほら、普通は、自分のカメラなのに撮ってばっかりで、自分がほとんど写っていないっていう方がいますよね。でも、私の場合は、アルバムを作って人に見せると、自分のカメラによくこれだけ自分が写れるよねって言われるんです。

自分のカメラは自分が撮影する側にまわってしまうから、写っていないことがよくありますよね。

私はその逆なんですよね。しかも、大体真ん中に写っているんです（笑）。あまり意識していないんでしょうけど、バックからカメラを出して、誰かに渡して、「この辺りをバックに写すといいわね、じゃあここに集まりましょう」って言っているうちに、たぶん真ん中になってしまうんでしょうね。変に遠慮しないから、撮ろうってときにはハーイって集めて起点になるんです。
でも、私にとっては自分のカメラで撮った写真に自分が入っていることは普通のことだったから、言われて初めて、あら、本当によく真ん中に写ってるわって気づいたんです。

バリ島のリゾートホテル、アマンダリで撮影。
デスクトップ画面にしているそうだ。
南国の湿気やゆったりとした空気、
スタッフの優しい心遣いなどの思い出が甦る

でも自分のカメラですから、自分が一番写ってるというのは正しいことかもしれないですね。

そうですよね！　自分のカメラですものね。
ところがね、今まではずっとそうだったのに、デジタルカメラを買ってから大きく変わったことがふたつあるんです。ひとつはパソコンのデスクトップ画面。今まではパソコンの中に入っていた画像をそのまま使っていたんです。でも、デジタルカメラを買ってから、「あ、デジタルカメラで撮った画像を入れればいいんだわ」って思って、初めてですよ、本当に生まれて初めて、旅行先で風景写真を撮ったんです！　これは私にとっては青天の霹靂というか、思ってもみなかった出来事なんです。自分の写っていない写真を撮るなんて、そんな日が私に来るなんて（笑）！

（笑）逆に、それまでにどうして風景写真を撮ろうと思わなかったんですか？

風景写真はガイドブックや絵はがきに、専門家がきれいに撮ったものがあるじゃないですか。私がパチっと撮るよりも1万倍きれいな写真ですよ。訪れた日に天候が悪かったらそれまでだし、基本的に景色は、まぶたをシャッターにして記憶しておけばいいんです。
撮った写真をデスクトップにするようになってから、パソコンを開く度にそのときの旅行の様子をしみじみと思い出すんです。たとえば気温とか、空気の湿り具合とか、どんな音がして自分がどんなコンディションだったとか、そういう細かいことまで甦ってくるんです。写真って自分が写っていなくても、そういう思い出を甦らせるものなんですね。それはやっぱり自分で撮った写真だからなんでしょうね。

デスクトップ画面に缶バッチに……写真との付き合い方が大きく変化

もうひとつ、大きく変わったなと思ったのは、この缶バッチなんですよ。缶バッチを作るおもちゃを頂いて、それをきっかけに撮った写真で缶バッチを作ってみたんです。これは弟が飼っているオーストラリアンシェパードの写真なんですが、フリスビーキャッチの大会に出て、初めてキャッチが出来たときの記念の写真なんです。それを缶バッチにして、家族みんなに配ったんですよ。
こんな風に写真を使って、いろいろな物に利用して遊んでいるというのが自分でも信じられないんです。写真は撮ったらアルバムに整理するだけで、それ以外はなかった。それがデジタルカメラを買ってから、ガラっと写真との付き合い方が変わりました。

デジタルカメラはCOOLPIX775を使ってくださっているそうですね。

はい。買ったのは3年前ぐらいです。これが初めてのデジタルカメラなんですよ。私、新しい電化製品を購入するのが遅いんですよ。留守番電話、ファックス、携帯電話やパソコンを買ったのも遅かったし、DVDだってアテネオリンピックの前に初めて買ったんです。
そのかわり、自分の中で機が熟して、いざ買うときになると、いろんな人から情報をもらって、今発売されている中でもいいものを買うんです。だから買ったときは、実力以上のものというか、いつも「それ使いこなせるの？」っていう状態になることが多いんですけどね。でも、一度買ったら大事に長く使いますよ。

このデジタルカメラも、とてもきれいに使っていらっしゃいますね。

そうでしょう（笑）？でも、電化製品の場合はすぐに新製品が出るから、大事に長く使っているとまた波に乗遅れちゃうんですよね。この間、香港にコンサートを見に行ったんですが、友人が新しい型のCOOLPIXを持っていて、暗い会場でもきれいにしっかり写っていたんです。そういうのを見ていると、もっと機能が充実したカメラが欲しいなって思い始めて。そろそろ機が熟してきたのかも知れないですね。実は今、一眼レフのデジタルカメラが欲しいなぁって考えているんです。また実力以上のものを買うんです（笑）。

実力以上のものを買うと、毎回マスターするのも大変なのではないですか？

大会に出て初めてフリスビーをキャッチした瞬間を激写。
厳密にはあと数mmでキャッチするところ。
「あと0.01秒後にシャッターを切っていれば
キャッチしたところを撮影できたのに」
と思うと今でも悔しいとか

そして、思い出のフリスビーキャッチ写真を
缶バッチにしたものがこちら

それがね、私ひとつだけ自分でもいいなと思う点があるんですよ。使用説明書をきちんと全部読むんです。私、説明書を読むのが大好きなんです。

大好きというのは珍しいかもしれないですね。

カタログみたいなものがあるとなんでも隅々まで読んでしまう性格なんです。よく、お菓子の箱に商品説明の紙が入ってますよね。ああいうものもじっくり読みますよ。他の商品を吟味しちゃうぐらい（笑）。だから、パソコンだろうがテレビだろうが、使用説明書を最初のページから理解するまでちゃんと読むんです。わからない言葉は調べて、"何ページへ行く"と書いてあったらちゃんとそのページに飛んで。
それが苦にならないのは、早く自分のものにしたいという気持ちが強いんです。それから根がおせっかいなので、1日でも早く使いこなして、隣で使えずに困っている人に教えてあげたいんです。

大好きなラジオ「やる気MANMAN!」は 大事な、大事なおもちゃ

文化放送で放送されている「吉田照美のやる気MANMAN!」は、今年で18年を迎えた長寿番組ですね。

そうですね。電化製品だけじゃなくてなんでもそうなの、仕事も長く、大事にするんですよ（笑）。私ね、ラジオが本当に好きなんです。私にとってラジオは大事なおもちゃなんですよ。おもちゃっていうと、ちょっとふざけた表現に聞こえるかもしれないですけれど。

おもちゃですか？

うまく説明できないんですが、たとえばテレビに出ていると、自分が将棋の駒になった気がするんです。スタジオにいくつかの駒が並んでいて、それをディレクターさんが細かくカット割りをして、つなぎ合わせてひとつのテレビになる。私はずっとラジオ畑で育ってきたからそう感じるのかもしれないけれど、自分の発言や行動では番組は進んで行かないんです。でも、ラジオは私が話さないと番組が前に進まないですから、なんだか、自分の手でいつでも触れられるところにラジオがある感じがするんです。
手の中にラジオがあって、その中で思いがけない刺激があったり、展開があったりするんですが、でも手の中にあるから焦ることがあっても、まぁいいやっていう安心感がある。そういう意味で、手の中のおもちゃで遊んでいる感覚なんです。でも、テレビだと手の届かない部分が多すぎて不安になってしまうんです。私どうなってしまうんだろうって。

長くやっていると、正直、マンネリを感じてしまうことはないのでしょうか？

この番組は1人ではなく照美さんと2人でやっているので、2人の掛け合いがあったり、ゲストの方がいらっしゃったり、スタジオの外から中継があったりするので、毎日新しい事がありますし、刺激もありますよ。
でも、これだけ長くやっていますから、たとえば照美さんとの掛け合いは、ある程度こう打てばこう返ってくるっていうのは予想がつくこともあります。それをマンネリと取るリスナーがいるかもしれないけれど、伝統芸と取ってくれるリスナーもいるんですよ（笑）。

照美さんと小俣さんの掛け合いは、番組のひとつの聴きどころですよね。

けっこう突っ込みが厳しいでしょう？　この掛け合いは番組が始まった頃からあるんですよ。予定調和で進む番組も数多くある中で、この番組は容赦なく、本当に痛い部分に蹴りを入れてくるなって思いますよ。
照美さんから、いきなり土足で畳に上がられたような、心がチクっと痛むようなことを言われるんですよね。自分では穏やかな性格だと思っていたのに、本番中にカッとなって、もう許せないって気持ちになってしまって。番組が始まった頃、その思いを、正直に照美さんに言ったことがあったんです。そうしたら「俺だって同じ事思ってたよ！　我慢してたんだ、お互い様だ！」って言われました（笑）。番組中は、いつもお互い本気でやりあってるんです。

今でもムッとすることを言ったり、言われたり？

ありますよ。でも、だから長続きしているんじゃないかと思うんです。本当ならば、なりふり構わず怒鳴りたくなるぐらいカッときているんだけど、本番中ですし、お互い我慢しますよね。でもその瞬間に、怒りの炎が我慢の隙間から垣間見える瞬間があるんです。それが聴いてる人に伝わるんですよね。その緊張感がね、ひとつ長続きしている理由なのかもと思いますよ（笑）。
リスナーの方が本気で「小俣さん大丈夫ですか？　もっと言い返してやりなさいよ！」って心配してくださるんですよ。ありがたいです、本当に。

こちらもバリ島のリゾートホテルアマンキラで撮影。
プールの向こうに美しいインド洋が広がる

ニューヨークに行ったときに撮ったもの。
ニューヨークから帰ってしばらくは、
この写真をデスクトップ画面にしていたそうだ

生放送だから何が起こるかわからない 番組中の大爆発を聞き逃すな！

小俣さんがラジオをやっていて、一番面白いと感じるのはどんなところですか？

掛け合っている中で、話がまったく思いも寄らない方向へ転がっていって、何倍にも、何十倍にも膨らんでいく瞬間というのがあるんです。その瞬間っていうのは本当に面白いですよ。会話の化学反応というか、大爆発の状態です。まさに快感ですよ。頭の中からアドレナリンが放出されているのがわかるんです。

ゲストの方と話しているときにそうなることもあります。思いがけない質問から想像の上を行く反応があって、さらにその上を行くような反応を返して、また返してってやっていくと、雪だるま式に大きくなって会話が転がっていく。そうなった瞬間の快感、絶頂感っていうのは、なかなか得難いものがありますよ。だって、それは関東平野の百万人のリスナーの絶頂感になるんですから。

ですが、大爆発の状態は意図してできることではないですよね。

でも、番組は毎日3時間ありますから、意図しなくてもどこかで起きますよ。逆に、常に大爆発が起きていたらこっちもリスナーも大変ですからね。オープニングトークかもしれないし、ゲストのコーナーかもしれないし、中継を結んでいるときかもしれないし。3時間、どこかで大爆発があればいいと思いますし、毎日必ずあるんですよ。

毎日何が起こるか楽しみですね。

スタジオ内の様子。吉田照美さんと

そう、生放送ですから何が起こるかわからない。生放送は5秒前にも、0.01秒前だってもう戻れないでしょう。さっきこう言えばよかったって思う瞬間はいくらでもあるんですけど、戻れないのが宿命ですからね。チャンスをいかにつかむか、チャンスの神様に後ろ髪はないって言いますけど、まさにそうです。
でも、3時56分ぐらいかな、番組終わりの「さようなら」って言葉を言った瞬間に、頭の中に反省という言葉はありません。番組自体にも反省会なんてありませんし、私の中でも、今日の放送はどうだったかな、なんて考えたことは今までに1回も無いんです。

どんな失敗をしても？

ええ。私がまだ入社したての頃の話なんですけど、当時、どこかの商店街から中継する「午後2時の男」という、お化け番組と呼ばれるほど人気の番組があったんです。新人だったので、その番組を何度か見学に行かせてもらっていたんですが、司会の月の家円鏡（現・橘家円蔵）さんが、番組が終わってからいろいろと話をしてくださったんです。
円鏡さんが、「アナウンサーさんって、どうして自分がしゃべったことをテープに撮って後で聴くんだろうね」って言うんです。「生放送はもう終わっているんだから、後で録音したものを聴いてもしょうがない。聴いている人としゃべっている人、その両方が同時に生でしゃべって、聴いているから生放送なのであって、それを後からじっと聴いていたってなんの意味もない。それよりも、今日の失敗は全部忘れて、明日どうしようかなっていうのを考えたほうがいい」、そういうようなことを言っていたんです。それもあって、私は今まで一度も、自分の番組を録音したことはないんですよ。

「私が一番熱心な番組のファンで、一番、番組を愛していると思っています」

それに、毎日私も番組を聴いているんですよ。「やる気MANMAN!」をやりながら、スタジオの中で聴いているんです。それをどうしてもう1回録音して聴かないといけないの？　と思うんです。 実は、私は「やる気MANMAN!」のヘビーリスナーなんですよ。百万人のリスナーの中で、誰よりも私が一番熱心な番組のファンで、一番、番組を愛していると思っています。

パーソナリティとしても、リスナーとしても、これからもずっと続いていってほしい番組なのですね。

そうですね、私が続けたいと言っても続けられるものではないんですけどね。でもこの番組を、パーソナリティとしての最後の番組にしたいと思ってやっています。 ラジオの番組は、だいたい2、3年で終わることが多くて、さらに続いて5、6年経つと、番組の色が確立されてなかなか変更が効かなくなるんです。「やる気MANMAN!」が5、6年経ったとき、私はこの番組をできるだけ長く続けて行こうって決心したんです。それがもうあと何年かで20年ですからね。20年を迎えてみないとわかりませんが、きっとなにかやり遂げた感じっていうのはあるのではないかと思います。

そう思ったときに辞めることも考えているのですか？

それはまだわかりません。そう思うかもしれないし、思わないかもしれない。それに、20周年を迎える辺りで、ちょうど団塊の世代の方たちが定年を迎えるんですよ。おじいちゃん、おばあちゃんとは言えない元気な人が増える時代が来たら、まだ続けてもいいよってなるかもしれないし、高齢化にともなって、おばあちゃんパーソナリティーが必要になるかもしれないですし（笑）。 まず、おもちゃとして私が遊び飽きていないかどうか、番組自体が時代の流れに合っているかどうか、それから放送局の指針、どれが欠けても番組は続きませんから、今は、それが続く限りやっていくだけです。

小俣さんは、まだまだ飽きることはなさそうですね。

そうですね。飽きたら辞めようよと思っているのに、まったく飽きないですね。遊び飽きない、いいおもちゃを私は得ているんですよ（笑）。

コンテンツトップへ戻る

※掲載している情報は、コンテンツ公開当時のものです。

株式会社ニコン 映像事業部
株式会社ニコン イメージング ジャパン

© 2019 Nikon Corporation / Nikon Imaging Japan Inc.